

## 令和3年度 名古屋大学総長顕彰授与式が行われました

令和4年3月25日（金）

学修への取り組み部門：豊田講堂にて

正課外活動への取り組み部門：豊田講堂 応接室にて

### 総長顕彰委員会

佐久間委員長（副総長・学生支援担当）

齋藤委員（文学部長）、松下委員（教育学部長）、枝廣委員（情報学部長）、阿波賀委員（理学部長）、土川委員（農学部長）、吉田委員（博物館長）、原田委員（生協理事長）

本顕彰に係る募集は、各部局への募集要項等送付、ポスター、ホームページを通じて、令和3年12月1日（水）～令和4年1月7日（金）の期間に行われ、その結果、「学修への取り組み」部門に8件の学部推薦が、「正課外活動への取り組み」部門に自薦・他薦を合わせて10件の応募があった。

これら合計18件の推薦・応募について、総長顕彰委員会による厳正な審査及び合議を経て、最終的に12名の学生及び学生団体を令和3年度総長顕彰として表彰することを決定した。

学修への取り組み	部門	受賞者
文学部 人文学科 4年		竹中 志織
教育学部 人間発達科学科 4年		後藤 梨華
経済学部 経営学科 4年		富田 遼介
情報学部 自然情報学科 4年		四谷 悠
理学部 化学科 4年		羽飼 雅也
医学部 医学科 6年		岩田 拓也
工学部 電気電子情報工学科 4年		田中 彬義
農学部 生物環境科学科 4年		渡邊 彩音

正課外活動への取り組み 部門 受賞者	
医学部 医学科 5年	沢田 蒼梧
名古屋大学学生支援本部 学生相談サポーター	代表：牧野 裕也
国際言語文化研究科 博士後期課程 3年	安藤 郁美
KMI Science Communication Team	代表：藤原 素子

【学修への取り組み部門授与式：豊田講堂】



【正課外活動への取り組み部門授与式：豊田講堂応接室】



## 学修への取り組み 部門 受賞者 受賞者のことば・講評

竹中 志織 文学部 人文学科 4年

### 自分自身の可能性を広げ続けて

私はこの4年間、「自身の可能性を狭めない」という軸の元で、広い視野と長期的な目線を大切にしながら学び続けてきました。

例えばVRゲームのプログラミングや教職科目など、一見専門分野である文化人類学には直接的に関連しないものにも広く関心を持ち学修しました。また特に興味があった外国語学習では、オールイングリッシュの授業や上海への留学、中国語スピーチコンテスト、余剰単位となる朝鮮・韓国語の授業などに積極的に挑戦しました。幅広い学習により知識が体系化され、未知の領域でも推測して考察する力が身に付いたと思います。

専門分野では名古屋圏の観光について興味を持ち、1年次からのフィールドワークや3年次のインタビュー調査などを通して、長期的な目線で卒業論文を執筆できました。

卒業後は公務員として多様な部署で地域のために活動していく予定ですが、社会人になっても自身の可能性を広げられるような学習者であり続けたいです。

**講評：**好奇心と向上心に満ち、計画的に学修に取り組み、非常に優秀な成績を修めた。学修成果のみならず、その過程における努力も高く評価できる。語学の習得にも力を注ぎ、上海への留学や中国語スピーチコンテストで優秀な結果を残した。課外活動においても主体的に責任感を持ち行動し、他の学生の模範となる人物である。今後は行政職員として、信念と挑戦を忘れず、活躍することが期待される。

後藤 梨華 教育学部 人間発達科学科 4年

### よりよい支援者を目指して

私は発達障がい児やその家族に対する支援に関心があり、授業だけでなく学外の活動にも積極的に取り組んできました。

特に発達障がい児の親御さんが講師としていらした授業で、発達障がい児とその家族への支援の現状などを知り、少しでも助けを必要としている人たちの力になりたいという思いからアルバイトやボランティアをはじめました。その中で、発達障がいといっても子ども達1人1人でその特徴が異なることや、その特徴を丁寧に見ていくことの大切さを実感しました。さらに、コミュニケーションに必要な共感的な態度、主体性、課題解決能力を身に付けることができました。

この反面、自分自身の未熟な点も明らかとなりました。卒業後は大学院へ進学します。そこで、授業や実習を通してさらに専門的な能力を身に付け、よりよい支援をしていけるよう研鑽を積んでいきたいと思っています。

**講評：**公認心理師及び臨床心理士の資格取得を目指し、積極的に学修に取り組んだ。机上の学修だけでなく、アルバイトやボランティア活動を通してより実践的に学びを深めることにも尽力した。悩みながらもより良い解決方法を模索し見出す能力、自身の関心を基に活動の幅を広げていく力は、他の学生へ大きな影響を与え模範となった。今後は大学院へ進学し、研究をさらに推進することが期待される。

## 富田 遼介 経済学部 経営学科 4年

### あらゆる経験を学びにつなげた4年間

私はこの4年間、講義やゼミナール等を通じた知識の蓄積と、ビジネスコンテストや学会発表、サークル活動を通じた知識の実践・応用に力を入れました。

入学当初から、経済学部内外の講義はもちろん、その周辺の学習機会を自発的に活用し、自身の学びへとつなげてきました。中でも大学二年次に参加したビジネスコンテストでは、学内52チーム中1位、全国数百チーム中上位10チームという好成績を残すことができました。三年次からはマーケティングのゼミナールに所属して消費者行動論の学習に力を入れ、四年次には卒業研究の学会発表も経験しました。また所属していた100人規模のよさこいサークルでも、大学で学んだマーケティングの知識や持ち前の学習意欲と応用力を発揮し、円滑なサークル運営に貢献しました。今後は社会人として新しい知識の蓄積とその実践に取り組み、私自身のさらなる成長や、周囲の人への貢献につなげていきたいと思えます。

**講評：**高い学修意欲を持ち、最上位の成績を修めつづけた。意欲的に学外ビジネスコンテストへ挑戦し、大学でインプットした知識を社会においてアウトプットする活動を通じて、実践的な応用力を身につけた。サークル活動ではチームの中心として組織運営に取り組み、模索しながらも自身のリーダーシップを見出し、実践した。「勇気ある知識人」として他の学生の模範となる人物である。

## 四谷 悠 情報学部 自然情報学科 4年

### 情報学による課題解決を目指して

私は、文理の区別を超えて、データから問題を客観的に捉え、課題を解決するという理念に惹かれ、情報学部に入學しました。

入学後は、分野融合型学部の特性を生かし、学科を問わず多くの講義を受講することで、幅広い分野の知識を得ることができました。また、学内外の講習会へと積極的に参加することで、実社会における情報学の利活用について学ぶことができました。これらの取り組みを通じ、情報学を用いた課題解決についての理論的および実践的な学びを得るとともに、自らで課題を発見し解決する力を養うことができました。

4月からは大学院に進学し、卒業研究として取り組んだヘモグロビンの分子シミュレーション研究をさらに展開させたいと思っています。また、より専門的な内容となる講義および研究を通して、高度な知識、思考、技術を習得するとともに、新たな価値を創造する力を身に付けられるよう努めて参ります。

**講評：**優秀な成績もさることながら、学修への意欲と知的好奇心に基づき、事を為すため躊躇なく新たな場に飛び込み、主体的に活動する点が大いに評価できる。取り組むべき課題の解決や技術の修得に秀でており、セミナーや実習において真摯に取り組む姿勢は他の学生の模範となった。今後は大学院へ進学し、将来の課題解決を先導する人材として成長することが期待される。

## 羽飼 雅也 理学部 化学科 4年

### 人と関わることの大切さ

入学時からコンピュータを用いて科学現象を解析する計算科学に興味を持ち、学部の講義以外の内容を積極的に学習してきました。競技プログラミングの学習を通してプログラミングを独学で学び、学部2年次から量子化学研究室のセミナーに参加し研鑽を積んできました。分子科学研究所の夏の体験入学では科学の探究を志す他大学の優秀な方々と出会えたことで、科学に対して真摯に向き合おうと思いきっかけになりました。

コロナ禍で人と関わるのが難しい時期には、自作の量子化学計算プログラムの開発やフルリモートの実務型インターンシップへの参加を通してプログラム開発の面白さと難しさを学びました。

4年間の学習を経て人と関わり刺激し合い、自らの研究に還元することが重要だと感じました。来年度からは大学院に進学し量子化学についての研究を更に進める予定です。学びに対する貪欲な姿勢をそのままに、積極的にチャレンジしていきたいと思えます。

**講評：**学部2年生時に量子化学研究室の門を自ら叩き、大学院レベルの研究に取り組んだ。また、SNSを活用し、量子コンピュータの企業へコンタクトをとり、先端的研究の動向を調べるなど、自主的、積極的に学修に取り組み、非常に優秀な成績を修めた。新しい学問を柔軟に体现できる力が群を抜いており、服部国際奨学財団奨学生に採用され、名実共にその成果が認められている。大学院へ進学し、今後の社会のあり方を変えるような研究成果を生み出すことが期待される。

## 岩田 拓也 医学部 医学科 6年

### 一歩ずつ積み上げて得た学び

医学は日々進歩し、得べき知識も膨大だからこそ、私は医師を目指すうえで、常に情報を得るべく学修に取り組んできました。

基礎医学セミナーにおいて分子細胞免疫学教室に所属し、がん免疫に関する研究に従事しました。予想通りの結果が得られない事も多くありましたが、自分なりの研究ノートを作成し、論文を読み、担当教員の方々との議論を通じて解決の糸口を見いだしていきました。その研究成果を学内で発表し、評価頂いたことは非常に励みとなりました。また、所属するサークル活動の中で救急医療への学びを深め、本学や他大学の学生との意見交流を行う機会を得ました。これらの経験を通して、地道に学びを重ねることの重要性を強く感じております。

今後は本学で培った学修への姿勢を大切に、大学生活で得た経験や知識を活かして、医師として一人でも多くの患者さんを助けることができるように社会へ貢献していきたいと思えます。

**講評：**日夜研究に打ち込み、担当教員と積極的に議論を交わし考察を深め、基礎医学セミナーにて最優秀賞、実習ノートはベストノート賞を受賞した。他の学生へも良い影響を与え、後輩の学修に役立つ功績を残した。医療系サークルでは、他大学の学生も参加できるワークショップを主催し、地域ボランティアとして救急医療の普及にも尽力した。医学部剣道部では部長を務め、まさに文武両道に励んだ。今後の医学界をリードする人材となることが期待される。

## 田中 彬義 工学部 電気電子情報工学科 4年

### 興味の赴くままに主体性をもって行動する

私は国際経験と研究経験の2つを軸に学部生活を主体的に過ごしてきました。

学部2年次に蘭・トウェンテ大学と英・ケンブリッジ大学への留学を通して国際交流に取り組むと共に、海外の学生の自らチャンスを掴む積極性に刺激を受けました。主体的な学びの場として学部3年次よりソフトウェア(SW)上での演算をハードウェア(HW)に実装することで高速化を検討するSW/HW協調設計の研究に携わる機会を頂き、高位合成によるFPGA向け画像推論器に対する前処理の検討を行いました。学部4年次からはバイオメディカルへの応用に向けた低消費電力な集積回路設計の研究を行っており、卒業後も同分野での研究を継続する予定です。また、これら研究活動を通して複数の国際会議で発表する機会にも恵まれ、貴重な経験を得ることができました。

卒業後は米国大学院の博士課程に進学を予定しています。学部時代に培ってきた国際経験と研究経験を土台に新たな環境で研鑽を積んでいきたいです。

**講評：**自身の研究に自発的に取り組み、研究分野に関する国際会議において3件の発表を筆頭著者として行う等顕著な成果を得た。実現不可能と思われる事にも自ら解決策を模索し、挑戦するという卓越した問題解決能力を持つ。ケンブリッジ大学での短期学生交流プログラムに選抜され、語学力の向上にも努めた。大学院に進学し、半導体集積回路設計分野を牽引する研究をさらに進めることが期待される。

## 渡邊 彩音 農学部 生物環境学科 4年

### 基礎を大切に積み上げた4年間

私はこの4年間、学修に最も力を入れてきました。専門科目で深い理解を得たいと考え、基礎科目から自分なりに講義ノートを作るなど復習を中心に行いました。3年生では、コロナ禍でほとんどの講義がオンラインとなりましたが、1、2年生で築いた学習リズムを生かし、積極的に講義に取り組めたと感じています。

今年からは森林生態学研究室で、動物の種子散布が植物に及ぼす影響について研究しています。研究室の他メンバーの調査にも多く参加し、調査手法や樹種名などの基礎知識を主体的に吸収しました。また、自分のテーマで、種子島での長期間の調査を無事に終わらせたことは大きな自信に繋がると共に、研究は様々な立場の方のご協力のもとに初めて成り立つものであると痛感しました。

来年からは同研究室で大学院に進学します。感謝の気持ちをもって研究に取り組み、4年間で学んだ知識と経験を土台として、テーマに対する答えを多面的に探っていきたいです。

**講評：**専門以外の分野についても、真摯に学修に取り組み、大変優秀な成績を修めた。卒業研究に関する屋久島、種子島での長期野外実習では自主的に地元住民や研究者と交流し、人的なネットワークを構築することにより、調査を完遂した。学修への真剣な取り組みと、たゆまぬ努力で身につけた学力、研究遂行能力に秀でている。大学院に進学し、森林・環境資源科学の分野において将来有望な研究者として成長することが期待される。

沢田 蒼梧 医学部 医学科 5年

## 医学生として、そして音楽家として

昨秋、「第18回シヨパン国際ピアノコンクール」に出場し、二次審査まで進出しました。世界三大音楽コンクールの一つと評される最高峰の舞台上で演奏を評価していただき、世界中の方から称賛の声をいただいたことは、医学を修める傍ら、ピアニストである師の下で音楽を学んできた私にとって、この上ない喜びであり、自分の歩んできた人生を改めて肯定できる機会となりました。同時に、音楽を生業として正解のない道を追求し続ける同世代との交流は、自分の価値観を見つめ直す契機となり、人生観を広げてくれました。

病院実習と演奏活動を通じて、患者さんや聴衆の笑顔を見られることが私にとって一番の幸せだと感じるようになりました。医学生として、そして音楽家として、どのように社会に貢献できるか、自分のやるべきことは何か、どんな人生を送りたいかを熟考しながら、目の前のこと一つ一つに真摯に向き合い、努力し続けていきたいです。

**講評：**クラシック音楽界最高峰の「シヨパン国際ピアノコンクール」本大会へ出場し、二次審査まで進出した。医学生としての出場は史上初の快挙であり、ピアニストとして大きな讃頌と注目を集めている。医学と音楽を高いレベルで学び続けるチャレンジ精神は本学の教育目標である「勇氣ある知識人」に相応しい。将来は医学と音楽の双方で人々に影響を与える活躍が期待される。

## 名古屋大学学生支援本部 学生相談サポーター

### いまできることを考え挑戦する

私たちは、名古屋大学の学生がサポーターとなり、学生の悩みに対する相談活動を行っています。しかし、新型コロナウイルスの感染が拡大し、活動が思うようにできない状況が続きました。その中で、大学に通えないなどの困り感を持つ学生に対して、私たちがいまできることは何かを考え挑戦しました。

学生支援本部主催のイベントをお手伝いしたり、オンラインと対面を併用しながら履修相談会を開催したりと、私たちなりに学生の困り感と向き合いました。また、2021年2月には、主管校として第14回全国大学ピアサポーター合同研修会「ぴあのわ online in 東海」を開催しました。史上初のオンライン開催でしたが、対面で行っていたときと遜色ない様子で盛り上がりを見せ、名古屋大学を発信源として日本全国のピアサポートを行う団体に大きな働きかけを行いました。今後も、SNSを駆使した新しい活動を行いながら、いまできることを考え挑戦します。

**講評：**新型コロナウイルス感染症が拡大する中、状況に合わせて柔軟に活動を展開し、活動内容を積極的に発信することで、本学学生の様々な悩みに寄り添いサポートした。活動が社会全体への貢献であるという考え方は評価に値すると共に、本学としても活動に感謝したい。利用者増加を目指しSNSを用いた相談窓口の整備に取り組む等、時代のニーズに合わせた活動をさらに推進することを期待する。

## 留学生の“隣人”として過ごした5年間

留学生が最初の半年を過ごす国際交流会館で5年間レジデンス・アシスタント（RA）として活動し、RAの仲間、寮関係者と連携して様々な寮生支援や交流活動に取り組みました。

支援活動では、新たに多言語の生活情報の継続的な発信や、寮生対象の防災セミナーの企画・実践に取り組むなど、留学生が日常生活で感じる「言葉の壁」「文化の壁」「経験の壁」を低くし、自分でできることを増やすための支援に力を入れました。また、RA活動全体の基盤作りにも積極的に関わり、RA間の情報・経験共有の活性化、RA研修、活動内容の明文化に貢献しました。最後の年は新型コロナウイルスの感染拡大により活動が制限されましたが、入居オリエンテーションのオンライン化を中心になって進めるなど、課題に対して今できることを常に探し、周囲と協力しながら実行できました。

今後は、岐阜県で地域日本語教育コーディネーターとして、RA活動で得た学びを活かし活動していきます。

**講評:** 周囲を巻き込んだ高い推進力ときめ細やかなサポート力を兼ね備え、日々留学生に寄り添う活動を精力的に行った。新型コロナウイルス感染症拡大という未曾有の事態においても、周囲と協力し、忍耐強く課題解決をし、頼もしい活躍をされた。ハンドブック企画・執筆にも取り組む等、先を見据えた活動も評価できる。今後は、地域日本語教育コーディネーターとして、社会での更なる活躍が期待される。

## KMI Science Communication Team

### 大学院生として科学を伝える、科学でつながる

KMI Science Communication Team は、素粒子・宇宙物理分野のアウトリーチを行う学生主体の有志団体です。研究室も学年も異なる大学院生が協力し、一般向けの科学記事の執筆・発信などを行っています。大学院生の立場で科学を伝える意義として、

- (1) より身近な科学の語り手として社会に発信できること
- (2) アウトリーチ活動が大学院生の自己育成の場となること

が挙げられます。「本学の素粒子・宇宙物理学分野において、大学院生が科学を発信する活動拠点を確立したこと」が評価され、今回の受賞に至りました。

また、専門知識を有した素粒子宇宙起源研究所の研究者とともに一般向け記事を共同執筆するなど、「身分や研究室の垣根を越えた学術交流を実現していること」も高く評価されました。

今後は他分野・他研究機関のコミュニティとも連携し、大学院生によるアウトリーチ活動をさらに盛り上げていきたいと思えます。

**講評:** 「科学をより身近なものへ」「アウトリーチ発信が自己育成となる」という活動意義に基づき、付箋紙を用いたWebコンテンツ・連動グッズ作成などユニークな活動を実施した。素粒子・宇宙物理研究の面白さを広める企画・運営を大学院生が中心となって行うことは、研究室の垣根を超えた交流に繋がり、大学院生の視野が広がるという教育効果も生み出している。素粒子・宇宙物理研究の裾野を広げ、研究者を育成する上で大変有意義な活動であり、今後の発展を期待する。